

西南の役薩軍戦士菩提寺の事



宮下 亮善

松峰山無量寿院浄光明寺は、西南の役薩軍戦士の菩提寺である。

『岩村県令記念碑』に、

明治十年九月二十四日城山陥ルヤ、鹿児島県令岩村通俊、予メ参軍山県有朋・川村純義ニ請ヒ、墓域ヲ此ノ地ニ定メ、川村参軍ニ聞キテ、西郷隆盛ヲ中心トシ、三十九人ノ順位ヲ定メテ葬ル。是ノ日県令属僚ヲ率イ来リ、隆盛ハ長持ニ納メ、其ノ他ハ毛布ニ包ミテ葬ル。自ラ筆ヲ執リ、各姓名ヲ記シ、木標ヲ建ツ。実ニ戦塵ノ渦中、礼ヲ厚クシテウメタルハ、英霊正ニ感動セシナラン。此処ヲ泉岳寺

義士墳域ニ倣ハント期セシモ、果サスシテ転任ス。

時の鹿児島県令岩村通俊は予め参軍山県有朋（陸軍中将）と参軍川村純義（海軍中将）に事前に願ひ出て、西郷隆盛以下、諸将の遺体を浄光明寺に埋葬しこの墳墓の地を赤穂義士の眠る芝高輪の泉岳寺にしたいとの深い願であつた。

この記念碑は、岩村県令の遺徳を顕彰するために、昭和十七年九月に建立されたものである。岩村県令は、高知県の人で、累進して農商務大臣になり、華族に列せられ男爵を授けられた。題字は西郷従道公の次男従徳侯が揮毫したものである。

現在、南洲墓地として広く喧伝されているが、元はといえは、浄光明寺の境内に南洲翁以下、西南の役薩軍戦士は葬られたわけである。明治初年（一八六八年）三月に神祇事務

局は『神仏判然令』を公布し、「廃仏毀釈」を断行した。藩内の寺院はすべて廃止され、明治九年の『信教の自由の布達』まで仏教寺院は存在しなかった。

薩摩、大隅、日向には、およそ一六〇〇ヶ所の寺院と、およそ二九〇〇人の僧侶がいたが、二年の間に寺領は没収され、僧侶は還俗させられた。この浄光明寺も、その例に洩れず廃寺の憂き目に遭ったわけである。それは明治政府の祭政一致の国策によるものであった。

岩村県令の志しは、南洲神社として、神道の祭式に則り、その御霊の慰霊が執り行われ今日に至っております。

そもそも、浄光明寺は弘安四年（一二八四年）創建され、ご開山は第三世宣阿上人にて、島津初代忠久、二代忠時、三代久経、四代忠宗、五代貞久、二十一代吉貴公の菩提寺で、



南洲翁位牌 製作者：高山学（八女市）

寺領四〇〇石、七三〇年の歴史を有する薩摩の名刹である。

「薩英戦争」における英国艦隊の砲撃、「廃仏毀釈」「西南の役」など、大きな時代の波に翻弄されて来ましたが、現住職で四十二世の法脈を保って今日に至っている。南洲翁の法名は『南洲寺殿威徳隆盛大居士』といい、西郷従道公の次男従徳侯が昭和十九年に人吉の永国寺に位牌が安置されましたが、平成

二十一年九月二十四日南洲翁一三三年忌に、本来あるべき浄光明寺のご宝前に安置されました。また、同時に『明治十年薩軍官軍戦没者之霊位』としての位牌も安置し、敵味方の区別なく回向されている。

◆永野九兵衛の実話

現在の西郷さんの墓地の辺りが、寺の本堂の遺跡かと聞いていましたが、明治十年前までの寺は、本堂なんぞ言う建造物はなく、本堂の跡の背後に面した所に隠居寺が在ったことを覚えています。現今の、南洲神社の所在地より、少し西に当たる処に忠久公の祠堂がありました。官軍は、寺の前に高さ三尺許りの防塁を築き、悉く境内の墓石を以つてした。

九月二十四日の朝、私が戦況を見ていた時だったが、官軍は、寺の前に四斤半の大砲を二門据えて、私学校を砲撃しました。

隆盛先生の遺骸は、山籠に入れられて浄光明寺境内に運んで来ました。その日の先生の服装は黒服を被つておられたのであったが、遺骸はそのまま長持ちに納めて、先生の木像の在る所より、少し背後のあたつて高い所がございました。そこに間もなく埋葬になりました。その後でしたが、丁度、午後一時の頃、官兵が先生の首を新しい手拭きで包み、それを提げて来ました。それより、菓研帽子を被つていた官軍の大將でしたでしょうか、氏名は何という人であったか知りませんが、青の大將が屈んで首実験を行いました。当日この光景を見に来ていた付近の人たちは沢山でした。

◆肝属ヨシ子の実話

当時の浄光明寺の六月灯の日は、士分格の男は五ツ紋付羽織、袴、女は紋付羽織を召し

て参詣するのが慣わしとなっておりました。明治維新までの浄光明寺の建物はとても宏大なものでありましたが、維新直後に壊されてしまいました。明治十年役の当時は、只今の公設市場付近（山下町）より、官軍が城山を攻撃しました。あの折、浄光明寺の墓石は官軍が、浄光明寺前の一帯に台場を築き、寺の下より、各町内に到るまで、竹籠の大きなものを置いてございました。それぞれ、廻りが六尺位あった。その中に土砂が入れてあった事を、今でも、記憶に存じております。

◆岩村通俊県令の談話『南洲神社沿革概要』昭和八年刊行

城山の落ちた日は、前から総攻撃のあることは知っていました。愈々終局になると思うたので、かねての考え通り、参軍に請うて西郷さん始め戦死者の遺骸は、此の方に貰い受

け葬ることになりました。戦いの終わったのを聞くと、早速浄光明寺の岡の墓地に行ってみました。そうすると重立つ人々の遺骸は、ここに持ってきてあつて、西郷さんだけは大きな長持ちに入れ、桐野だの別府だのは、死なれたままの体をそのまま雨がりの地の上に横たえてありました。たしか桐野さんは赤いフンドシか締めて棕櫚の毛でこさえたワラジを履いておられたようで、如何にも覚悟の様子があらわれていました。その日はひどく雨の降った後ではあるし、陸軍の方には人足なども十分に用意が整っています。けれども、私の方には何も無いので、大いに困りました。が色々心配を連れて参って、それぞれ手当をしました。また陸軍の方に頼んで、毛布を譲って貰い、それでひとつひとつ遺骸を包んで葬りました。つまり追々は四十七士の墓みたいにするつもりで葬りました。人々の身分

（のことなどは、川村（参議純義）さんに聞いておいたので、それぞれ次第を定めて葬りました。かえすがえす混雑の際ですから、遺骸を取間違えるような事でもあつてはならぬと思ひまして、一々私自ら名を書きつけて印しをしたのであります。

けつをしす
辭 闕

独不適時情

独時情に適さず

豈聴歎笑声

豈歎笑の声を聴かむや

雪羞論戰略

恥を雪がむとして戰略を論ずれば

忘義唱和平

義を忘れて和平を唱う

秦檜多遺類

秦檜遺類多く

武公難再生

武公再生難し

正邪今邦定

正邪今邦ぞ定まらむ

後世必知清

後世必ず清を知らむ

「自分一人だけ時勢に合わず、意見が用いられなかった。どうして反対派の人々の歎び笑う声に耳を傾けておれようか、いや聴くにたえない。武公岳飛が金に進攻された宋国の恥をそそぐ為防御反撃の戰略を論ずると、正義を忘れて金と和平を唱えた売国奴の秦檜、その残党のような者共が多く、武公のような忠臣はもはや再び世に出にくくなった。このたびの朝鮮問題はどちらが正か邪か今どうして決まろうか。決められることではない。後の世の人々は必ずどちらかが清く正しかったかを知るであらう。」「」は他の文献引用。

この『辭闕』は、所謂、征韓論争に破れ下野した明治六年十月に詠んだものである。南洲翁は自信を岳飛になぞり、大久保派を秦檜にたとえて非難している。明治維新は、欧米列強からの植民地支配との必死の戦いであつ

た。この後に台湾出兵、江華島事件など、昭和二十年（一九四五）の大東亜戦争敗戦までのおよそ七十年までの「分水嶺」が、明治六年の政変であったといえる。

与謝野晶子が詠んだ「御仏の浄光明がとこしえに 護るならまし 南洲の夢」

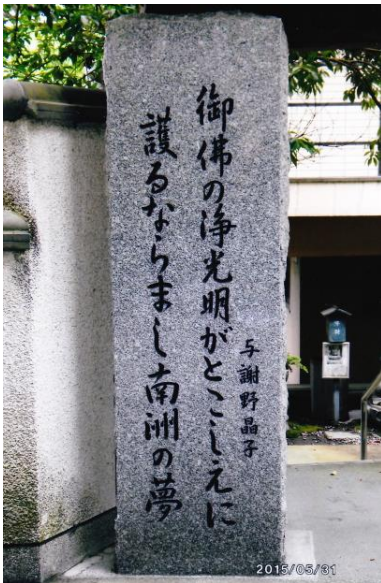
その「南洲の夢」とは、「後世必ず清を知らむ」とは、今日の東アジア情勢を俯瞰する時、また、中国の南シナ海への国際法無視の蛮行を思うと非常に暗示的である。

浄光明寺門前に建立された歌碑は、昭和四年に南洲翁の墓前に与謝野晶子が鉄幹と参詣した折りに詠んだものである。その建立の趣旨は、南洲翁以下、西南の役戦士の菩提を弔う事と、菩提寺としての証しを後世に継承するという願いが込められたものである。

その除幕式と西南の役薩軍戦士の菩提を願う法要が、平成二十五年九月二十三日に当寺

にて、遠くは北海道、東京からも南洲翁を慕う多くの方々が参集され、西南の役後一三七年ぶりに、第四十二世村上正空導師のもと厳かに執行されました。

西南の役は、かつて郷中教育で学びあった仲間同士が敵味方に別れて戦うという悲劇。近代国家建設途上の中、惜しみてもあまりあるものがある。



歌碑 揮毫者：下尾恵美子

御仏の浄光明がとこしえに

護るならまし南洲の夢

— 与謝野晶子 —

先生のうしろ左右にならぶなり

若き隼人の山の墓さえ

— 与謝野鉄幹 —

濡れぎぬをほさんともせず子ともらの

なすがまにまに果てし君かな

— 勝 海舟 —

打つ人も討たる人も味気なや

同じ御国の人と思へば

— 勝 海舟 —

(天台宗大雄山 南泉院住職)



浄光明寺（南洲墓地）に建立されていた南洲堂。大東亜戦争末期の鹿児島大空襲で焼失した。上野の西郷像の原型で高村光雲作の木像が安置されていた。明治32年2月22日建立・昭和20年7月31日焼失。